

ルソーの女子教育

—その現代的視点から—

横 山 ひろみ

ルソーの女性観が、彼の生い立ちから成人に至るまでに関わり合った多くの女性たちの性向や感性などから大きな影響を受け、感覚的に成立したものであることは前論文において指摘した。⁽¹⁾ 『エミール』におけるソフィーや『新エロイズ』のジュリは、それぞれ彼のイマージュのなかで理想の形に姿を変えた現実の女性たちの集大成であった。その理想の女性に対する教育がどのようにあるべきかとの視点から、ルソーの女子教育論が成立したのである。いろいろな可能性を十分に考慮した上で、ルソーは彼独特の女子教育論を展開した。もし、彼がよく指摘されるように女性蔑視の立場からのみ女子教育を考えていたとすれば、ジュリに対して行なった様な自由な立場の、いわば男性と同じ視点での女子教育を考える筈はなかったのである。このことはまた後で触れるつもりである。しかし、教育は本来人間に対して行なうものであり、理想の教育とは男性、女性の区別は有り得べきものではない。この点に関してはルソー明快である。言うまでもなく『エミール』に展開された教育の骨子は人間の教育であり、その教育は「自然の道」⁽²⁾ に沿い、自然の規則に従う⁽³⁾ ことが要求される、いわゆる「自然主義教育」なのである。この教育は「自然」「人間」「事物」の三つの教師によって行なわれる。「自然」が教えてくれるのは人間の「能力と器官の内的発展」であり、「発展をどう統制するか」を教えるのが「人間の教育」であり、「人間に働きかけるものについての我々自身の経験から得られる」のが「事物の教育」である、とルソーは言う。⁽⁴⁾ 更に「物を求めたり避けたりする」ところの「欲求」には3つの要素「感覚が我々に快いか不快か」(快・不快)、「我々と物とが適合するかしないか」(適・不適)、「理性によって与えられる幸福と、完全性とかの概念に基づいて我々が下す判断」(幸・不幸、

善・悪)があるという。⁽⁵⁾ ルソーの女子教育の基本的視点はどうやらこの「欲求」と「能力と器官の内的発展」との発達段階として「感覚」あるいは「感覚的理性」の涵養をどのように行なうかに置かれていたようだ。ルソーは『エミール』において感覚の段階は12歳まで、感覚的理性の段階は15歳まで、そして知的理性の段階は20歳までに教育を進めなければならないとする。⁽⁶⁾ ソフィーは15歳までに女性としてすべての教育を終了した。知的段階の教育はどのようなのか明らかではない。このことも含めて多くの論者は両性の「不平等」を前提とするルソーの女子教育の在り方を非難するが、彼の実際の意図はどうであったのか、いま一度『エミール』における「女性観」を詳細に追ってみる必要がある。

I 女性の本質について

1) 両性の相違: 「性に関わりのないすべての点において、女性は男性である。同じ器官 (les mêmes organes), 同じ欲求 (les mêmes besoins), 同じ能力 (les mêmes facultés) をもつ。」 ルソーの人間観の基本的姿勢はここにあり、どのようなレトリック、比喩、逆説を用いていようと彼の女性観もこの点に帰着する。問題は「性」をどのように捉えるかである。このことは現在に至るまで明快な結論が得られていない。男と女との一般的な違いは確かにこの「性」から由来すると考えられるが、「それが性に関わりがあるか、あるいはないかについて、私たちには分からない。確実に知っているのは、両者が共通に持っているのはすべて種に属し、相違しているものはすべて性に属するということだ」と彼は言う。そして、両者の精妙な相違と類似をあわせもつ存在を作り上げた「自然」を賛美するのである。彼は結局「両者は基本的には等しくもなく等しくなくもなく、似てもいれば違ってもいる、つまり補足的 (complémentaires) なものだ」(7, Notes et variantes, p. 1629) という結論に達する。しかし「女性の存在には保護者さもなくば夫が必要である (Elles ont besoin d'un tuteur, sinon d'un maître (8, supra p. 662))」と言う。このことが女性の従属的習慣を引き起こすのである。しかし、こうした女性の従属性は男性によって作ら

れたのではなく、先験的な（自然によって定められた）ものであることを強調する。

2) 精神における比較： 両性が補足的であれば、共通の目的の為に両性は結合して異なった方法で協力することになるが、この多様性が「精神的関係における」両性の相違を生ずる。この結合を前提とすれば、一方が能動的で強力であれば、他方は受動的で弱くてよい。従って、一方は意志と力をもたなければならないが、他方はそれほど抵抗しないでも十分である。⁽⁹⁾ このことが自然が与えた原則であれば、「女性は男性に好かれるために作られている」とルソーは考える。しかし、それでは常に男性がその力に任せて女性を屈伏することになり、両性は不平等である。「両性は平等であり、肉体的、精神的に見られる相違は補完的である」ならば、女性に男性の暴力に対抗する力を与える必要がある。「女性が男性に勝つための力、それは魅力 (charmes) であり、自然が強者を従わす武器として女性に与えたものが「恥じらい (la honte)」と「慎ましさ (la modestie) である」と彼は主張する。何故なら、女性の力と男性の力に自然は平等の能力を与えているからである。

強くても弱くても「力」を発揮するためにはその対象に対する諸々の願望 (le désir) が必要である。願望を充たすための欲求 (le besoin) のエネルギーが情念 (les passions) となる。「動物の雌も（人間と）同じ羞恥心を持ち、必要がなければ欲望はなくなる。その時期は短く、直ぐ過ぎる。それを決めているのは本能である」⁽¹⁰⁾ と、ルソーは言う。欲求をコントロールするのは、動物の場合は本能であるが、人間の際限のない欲求を規制するためには別の手段をとらねばならない。自然は（ルソーはここでは最高存在 (L'Être suprême) という言葉を用いている）男性に際限のない情念と、これを規制する法（理性）を与えた。女性には際限のない欲望を羞恥心によって抑制させている。「羞恥心は消極的本能 (instinct négatif) である」というから、女性の情念のコントロールは本能で十分対処できることになる。つまり、女性の力は弱く、攻撃性はないから、受動的なものにとどまるかぎり羞恥心で十分コントロール出来るのだが、男性の暴力的な力の抑制には理性を必要とするのである。⁽¹¹⁾ これら

の記述を見る限り女性はあるに本能的に生きる存在であり、理性は必要ないように見える。

3) 理性について： そうではない。女性も理性を持たねばならないし、持っている。しかし「女性の理性は実践的である」 従って、「既知の結論にはすぐに到達するが、その結論を発見することは不得手である」。⁽¹²⁾ ルソーは「女性はその理性においてレールの敷かれた目標に到達する手段には長けるが、哲学的な総合的な思索によって道を発見したりすることは得意ではない」と断定する。残念ながら彼の言葉は現代においても一般論として間違いではないことを認めざるをえない。しかし、自然が定めたことであって、両性の社会的な構成を安定化させるためには、そうした能力の違いは必要なことである。つまり、男性も女性もそれだけでは完全な人格ではない。両性の適正な交わりからひとつの道徳的人格が生まれ、男はその腕に、女はその眼となるのである。両者が依存し合い、その分与された長所を侵さず、足らざるところを補い合い、調和のとれた状態を作り出すことによって共通の目標に向かうことが出来る、と説くのである。もし、女性が原理を発見することが出来たとしたら、そして男性が（女性のように）その詳細な点を把握する知恵を持ってしまったとしたら、男と女との良好な関係は破壊され、永遠の不和を招き、すべての社会に終わりがやってくる、と彼は脅かすのである。⁽¹³⁾ いささか苦笑しながらもこの言葉に一面の真理があることは認めなければならない。男性に劣らず優れた思索的な分野で活躍している女性は確かに増えてはいるが、女性の感覚的、言い換えれば実践的な理性に任せているほうが世の中は万事うまく行くことも事実である。歴史的に見ても、あらゆる闘争は男達の、つまらぬ、原理的な *idée* によって引き起こされている（本能として、それは所有欲から発生している、とルソーは述べている。（『人間不平等起源論』） もし、女性が全ての社会の支配者であったとしたら、この世は平和で争いのない社会が出現するかもしれない。しかし、問題も残る。権利を持った女性はもはや女性本来の感性を失い男性的なものを獲得するに違いないし、そうでなければ更に大きな保護（者）の元でしか力を発揮できない形態になるかもしれない。原始母系社会、とくに

シャーマンの社会はそのよい例を示していると言える。その一方で、キリスト教やユダヤ教などの父系社会では、結局この世から争いの種をなくすことは出来ないのだろうか。そうであるとすれば男性、女性がそれぞれの特性を生かし合って相互依存的に調和することによって平和が保たれるとするルソーの指摘は、現代社会の問題点を明確に予見しているといえる。

4) 性的分業について: 「女性の職分は母である」ルソーのこの言葉は多くの誤解を招いた。子供を生めない女性は職分を持てぬことにもなる。彼の意図はそうではなく、性的分業ということが自然によって決められていることを強調したかった。戸外で、日光や風雨にさらされ、疲労し、危険に対して抵抗する頑健さを必要とする作業は男の職分であり、妊娠、育児という激しい労働は男の作業とは異なる、繊細さや臆病さを必要とする、女性の職分である。このことについては何人も異論はないであろう。女性は、あるいは訓練の仕様によっては男と同じ頑健さを身につけ、男性と同じ作業をこなすことが出来るかもしれない。プラトンの『国家篇』を引用してルソーは男女平等の根本的な誤解を非難している。男性は決して女性の役割を果たすことは出来ないのだ。もし、役割分担においても男女平等を主張するとしたら、男だって妊娠して子を生んでいい筈だ。その自然の法則を忘れて「両性を至る所で同じ職務、同じ仕事につかせて混じり合わせる」社会的雑居制が間違いなのだ、「自然の感情」はもっと甘美なものだ、「自然の感情を人為的な感情の犠牲にしてはならない」とルソーは叫ぶ。

働く女性が下層民視される男優位の社会環境のなかでも、ルソーの主張はしばしば誤解を受けた。男女雇用機会均等法が施行され、表面的にはとりあえず、男女平等の雇用の機会が増えてはいる現代社会においても、男女差別は根強く存在している。ただ、それが未だ男性優位の社会であるための差別なのか、あるいは男女性的分業の本質に根ざす形態なのか、明らかではないが、ルソーの視点をその意味において再吟味することが重要である。

II 女子教育の基本的視点

以上述べた女性の本質に基づいて、ルソーは女子教育の基本についての立場を次第に明らかにしている。「男性と女性とが性格においても体質においても同じように作られていないことが示されるなら、両性の教育は同じであるべきではない。自然の指示するところに従えば、両性は協力して行動すべきだが、同じことをなすべきではない。仕事の目的は共通だが、仕事そのものは違っており、したがって仕事を方向づける好みも違っている。⁽¹⁴⁾」ルソーはこの考え方を基本として「自然の男性に適合した」女性がどのように作られるかを考えるのである。この場合の「自然の男性」は人格的に完成した男性を示す。(ルソーの「自然」の使い方は男性と女性とで異なるときがある、Notes et variantes, 1635 参照) 従ってそれに「相応しい」女性という意味になる。

どのようにすればよいか。前に述べたように、女性が「恥じらい」と「慎ましやかさ」を武器にするかぎり、男性の力に屈伏することなく平等に扱われる。だから女性は女性だけが持つ「魅力 (charme)」を磨きぬいていかねばならない。しかし、その方向を誤ってはいけない、その対象の選択を間違ってはならない。女性の持つ、男性のいうところの欠点 (défaut) は多くの場合、女性については美点 (qualités) なのだ。そこに落とし穴がある。もしその選択が分からぬときは自然の導きによることになる。男性たちは自然が彼女等に与えた武器を「心行く迄磨ぎすまず」のを放っておくべきだ、干渉してはいけない。もし、彼女たちを男のように育てたら女は女の武器の扱い方すら忘れ、男に征服されることになる。それは結局男にとって損なのだ。これらはルソーの女性心理への洞察力をよく示している。さらに次のように強調する。「女性が男性に似ようとすればするほど彼女たちは男性を支配できなくなる、何故ならば、両性に共通な能力は全て、両性に平等にわけ与えられているのではなく、補い合っているからである。女性は女性として、より多くの、男性としてより少ない価値を有する。彼女がその権利を正当に用いたとき、その最上のものを獲得し、彼女が男の権利を侵害しようとするれば彼女は男よりも劣ったものとなる。⁽¹⁵⁾」

つまり、女性の教育の本質はとくに女性のなかの女性を育てることで、女性のなかの男性を育てることではない。女性の本質はそのようなものである。

「分別のある母親はその娘を立派な男にしようとして、自然を否認するに等しいことをしてはならない。立派な女としてやるがよい。そうすれば、彼女が自分自身にとっても、私たち男性にとってもより多くの価値を持つであろうこと」⁽¹⁶⁾ をルソーは確信している。「女性の中には女性と男性のそれぞれの芽が共存している」というルソーの考え方は現代的に言うならば、「女性は男性ホルモンと女性ホルモンをあわせ持つ」ということになるだろうか。女性の中の男性を育てることは、いみじくも男性ホルモンの旺盛な分泌を促す教育環境なり社会環境を意味する。Gendre (心理的性) の出現する現代の風潮を見れば、ルソーの指摘がきわめて的確であることが分かる。

ルソーは女性の教育の必要性についてあらためて次のように言う。「自然は、女性が思考し、判断し、愛し、知り、容貌と同じように精神を磨くことを欲している。自然は、こうした武器を女性の手に、力の不足を補うために、また、男の力を管理できるように、与えたのだ」。⁽¹⁷⁾ さらに彼は「女性と男性とはお互いの為に作られているが、それぞれの相手への依存の程度が異なる。男性は欲望によって女性に依存し、女性は欲望と必要性によって男性に依存する。私たち男性は女性なしでも、まあ生存できるが女性が私たちなしで生存するのはずっと難しい」⁽¹⁷⁾ と付け加える。この部分はルソーの女性蔑視を示す記述のひとつとされるが、たしかに男性優位の感情は見えるが、彼の意図は女性と男性の立場を明確にすることにあるので、女性を軽蔑しているのではない。女性の立場は簡単ではない。「男はだれでも自分のことだけを考えればよく、彼が正しい（と思った）ことをするかぎり、しようと思えば人々の意見に対して拒否することも出来る、しかし、女性が正しいことをしたときでも、それだけではその課題のやっと半分に達したに過ぎない。（そのことを人々にきちんと報せる必要がある）」つまり、彼女たちは価値があるだけでは十分ではなく、それを評価されねばならないのである。人々の意見や評判というものが女性にとって如何に大事で、死活に関わるものであるか、ルソーはよく知っていた。かくして「女性の教育の体系は、男性のそれとは反対のものであるべき」⁽¹⁸⁾ という考えに到達する。

多くの論者が言うように、ルソーのこの考え方には当時（18世紀）の社会風俗なり習慣の影響を免れ得ない。ルソーの女性蔑視の傾向（もしあるとしたらだが）はこの風潮に由来するといわれる。本来、ルソーの指摘するように、両性の依存性は相互的で平等であるはずだが、この時代はとくに女性にとっては厳しい目が向けられていた。とくに結婚によって女性の規則や習慣は夫の権利に従わせられる状態であった。しかし、そうした社会的風潮のなかであって、一見圧迫されているようであっても、女性というものは、本質的に多くの異性の中にこそ真の生き甲斐を見いだす性（業）を持つ存在であることを、ルソーは明敏に見抜いていたのである。男女平等主義が蔓延している現代社会ではあるが、「女性の味方をする粹人（des galants partisans du beau-sexe）」ではなく、女性の本質と在り方を認め、そのうえで女性の能力を尊重することが、ルソーほど現代人は出来ているであろうか。

Ⅲ 女子教育の実際

前述の視点に立って、ルソーは具体的な女子教育論を展開する。多くの論者は「女性は男性の従属的な存在であり、男性のご機嫌をとり、男性を喜ばせ、男性に奉仕する事を以てその本来の使命とする存在である」というのがルソーの教育論の中心であるとして非難する。それは『エミール』出版の当時のみならず、現代に至るまで人々の指摘するところである。彼を弁護する研究者も、ルソーが当時のフランス上流社交界の貴婦人たちの放埒な生活ぶりを非難する、彼一流の皮肉や誇張である、とも言う。確かに『人間不平等起源論』、『経済論』、『社会契約論』などにおいて適正な人間理解と理想国家あるいは社会を目指した彼から見れば、当時の社会は腐敗そのものであったであろう。とくにその責任は政治や人事に介入する上流貴族夫人にもあることも知っていた。しかし、彼自身が、ヴァランス夫人やドゥドト夫人、デピネ夫人などによって庇護を受け、成長してきた過程を考えると、貴婦人たちの存在がよい面にも、悪い面にも、文化の発展に重要な役割を果たしていることは十分に認めていた。前述したごとく、ある意味では他の誰よりも、ルソーほど女性の本質を理解し

尊重していたものはなかったといつてよい。『告白』に見るごとく、それがきわめて自己中心的で、美化されたものであったとしても、ルソーは多くの女性達によって啓発され、助けられ、愛された。それ故に彼女たちを暖かく見守りこそすれ、軽蔑する理由はないのである。ルソーの「女性蔑視」という評価は改められなければならない。むしろ、その自負ゆえに自分が尊敬し理想とした女性、ヴァランス夫人の軽薄な不実を許すことが出来なかったのである。何よりも彼女をそのように偏向させた、若い頃の彼女に与えられた家庭（教師）教育を憎んだのである。従って、ルソーの女子教育観は当時の、特に上流社会の婦女子の倫理感覚を非難することから成立したと単純に決めつけるわけにはいかない。彼自身の生涯にわたる、どろどろした怨念ともいふべきものが論理的に結実し昇華したものとも言えるのである。以上を念頭において、女子教育の具体的な内容を追ってみることにする。

a) 男性の為の女性教育： 社会の中心は男性であるということを認めたとしても、その男性の教育は全てその母親によって行なわれるのは自明である。どのような男性が出来上がるか、それは女性によって、その男性の成長に関わる全ての女性によって（ルソー自身のように）決まるとルソーは言う。⁽¹⁸⁾ それ故に男性の教育は遑ってその女性の教育に支配される（ルソーのヴァランス夫人への想いが伝わる）。ルソーは男性のために尽くすべき教育を次のように述べている。「男性に好かれ、男性の役に立ち、男性から愛され敬われ、幼いときは育て、大きくなれば配慮を尽くし、助言し、慰め、その生を快く甘美なものとする事、それこそ、いついかなる時にも女性の義務であり、女性に子供の時から教えるべきことなのである。⁽¹⁸⁾」この箇所は、女性は男性に尽くすために生きるべきことを説いたものとされている。しかし、男性に尽くして愛されるのは容易であっても、同時に敬われ、長じても彼に助言でき、その進むべき方向を示してやるということは生半可な能力では出来ぬことである。もし、男性がそれをするとなれば、彼はその遂行のために大いなる努力を尽くし、しかも自分自身の生き方を犠牲にしなければ不可能なのだ。女性はそれをやってのける。しかも自分は十分にその生を楽しみながら。その能力を与えられている

のは女性だけなのだから、それを子どものうちに十分開発しておくべきである、とルソーは指摘するのである。そこから教育が始まる。

b) 男性の選び方： 「能力があるだけに女性たちは相手とする男性の選択を誤ってはいけない」と、彼は続ける。真の男性を選びなさい。下らない、軽薄な男達を選んではならない。馬鹿な男性は馬鹿な女性を好む、しかも馬鹿な男性を作り出すのは女性なのだ。女性のみが本来持っている媚態 (coquetterie) を自然の意図に合わせ、それを調和させるようにすることで、もっとも適合した教育を受けることが出来るのだ。ルソーはこのように女性だけが適合できる教育の在り方を力説するのである。

c) 身を飾ることについて： 「女性が身を飾るのは自分が可愛いだけで満足するのではなく、他人によって称賛されたいと願う気持ちからだ。この気質は女性特有で、それ故、他人への配慮とか評判に対して敏感になるから、このことも女性の教育手段として有力である。」 ルソーのこの指摘はきわめて的確であり、今日の多くの教育者が、女子の教育の際に曖昧に感じていながらも把握できなかった本質を明確に突いている。

女性の、身を飾る習慣は小さな子供の時から既に出来上がっている。その例が人形遊びである。これは男性と全く異なっていて、「明白にその使命に基づいて決定された好みである」⁽¹⁹⁾ とルソーは言う。おそらく女性が人形に興味を持ち、着せ替え遊びなどに一日中飽きない様子は、男達を呆れさせるのであるが、それは誰に教わったものではない、生得的な行動である。少年達が戸外で西部劇ごっこや忍者ごっこに走り回っている一方、女の子は部屋のなかでひっそりと人形を飾って楽しんでいるのである。それはそのまま「自分自身が人形になる瞬間を待っている」⁽²⁰⁾ とも言える。これは明らかに女性特有の性向である。我々の子供時代は、男の子と女の子との遊びは自然とそのようなことで区別が付けられていた。時折、目鼻立ちの整った少年がお姉さま達の人形遊びのなかに加えられ、子供心にもその甘い雰囲気目眩む。発達心理学的に言えば、その華やかさの味を忘れ得なかった男の子が次第に異性願望をつのらせて、ついには己れ自身を異性化することで倒錯した性の喜びを味わうのである。ル

ソーの指摘は現代社会における心理的性 (gendre) の発展をも予知している。しかし、彼はそのような気質を女性の教育としていかす方向で、裁縫、刺繍、レース編みなどの繊細な技術の無理のない習得への道を開き、更にそれらが自然に図工、絵画の習得へ発展するものであることを示唆しているのである。

d) 肉体か精神か： 最初に教えることは女性にとっても「体を作ること」である。女性が柔弱であれば男性も柔弱となる。何故なら、体は心より先に生まれるからである。このことは両性とも同じだが、ただ、男は力を付けるため、女は魅力を増すためである。ルソーの理想とする女性の肉体像は、明らかにギリシャ時代の健康的な均整のとれた姿態である。彼自身の持病や肉体的な不健康からくる憧憬とも言える。従って、ゴシックふうの衣装、特にコルセットなどで不自然に拘束した女性の体には嫌悪を示している。この風俗など「ついには人類を退化させるのではないか」とまで言う。女性に望まれる優雅な姿態は、ゆったりしていなければ得られない。重苦しい様子は洗練さとは異なる。健康な新鮮さがなければ、真の楽しみや喜びは見出せない。⁽²¹⁾ ルソー自身、自然のなかに身を浸すことがどれほど生きていることの喜びに結びつくものか、よくわかっていた。あの、ル・シャルメットやエルミタージュでの自然に親しんだ生活がどれほど彼の心に深く刻みこまれていたか、そして長い間彼を苦しめていた尿道疾患の苦痛を考えれば、健康への讃歌は当然といえる。

e) 拘束的な教育： 読み書き、算術を学ばすにも少女の知的好奇心を上手く利用して、自然に行なうべきだ、とルソーは説く。課業を与えるには、その正当性を説きながら、強制的に行なうほうが効果が大きいと考えるのである。女性にとって従順さというのは、束縛を与えつつ、慣れさせることによって得られる。女性にとって従順さは本質であって、もしそれが束縛されることで不幸になったとしても、あとに生ずる大きな不幸よりもずっとましなのだ。つまり、女性にはある程度の拘束や束縛によって悪習がつかないようにする必要がある。ルソーの女性蔑視の証拠のひとつとされる、この件はあのヴァランス夫人の不道徳がどれほど彼の念頭にあったかを考えないと理解できない。「自分に勝つことを女性に教えよ」それが女性の誠実な生き方のひとつである。何故な

ら、男性のもつ諸々の患いはもともと女性によってもたらされたものであるから、女性もその責任を等しく負うべきである。⁽²²⁾ このような考え方は「男と女とは相補的なものである」ことに立脚する。ややもすれば女性はその生き方において（受け身的であるが故に）安易に流れやすい。そのための拘束であり束縛であることを十分認識しておくことである。さらに、女性は男性がそう感じるほど、その拘束を苦痛とは思わない、むしろ喜びですらある、とルソーは言うのである。⁽²³⁾

従順さ (docilité) は女性の美德だが、それは優しさから生まれる。男性という不完全な、欠点だらけの存在とともに生きていくためには従順であらねばならない。「欠点だらけの存在に服従するように、女性は作られているのだから、不正に耐え、夫の過ちにも不満を言わずに我慢することを早くから学べ」。⁽²⁴⁾ この言葉は、あまりにも男性本位、女性蔑視のものとして多くの非難を浴びた。今日の社会常識から言えば古くさい倫理感覚に基づいたものであることは確かである。しかし、その意味であれば、現代において、女性がどれほど、その「古くさい倫理感覚」から解放されているか疑わしい。ルソーの時代はそうした男性中心の社会であったし、当時の常識からはなはだしく逸脱していたわけでもない。また、このような感覚は、わが国でも江戸時代から第2次大戦ごろまでは、きわめて普通の常識であった。しかし、それで彼女たちはすべて不幸であったかといえ、必ずしもそうとは言いきれない。当時の女性の地位は確かに法制度的には低い地位に留められていたが、家庭内における実質的権力は高い場合もあったという見方も出来る。たとえば、武士の第一義的本分は主人に忠誠を尽くすことであるが、同時に父母に孝養を尽くし、妻子を大切にすることが真の武士たる条件として求められていた。妻や母はその主人たる男子にその人生の全てを託し、従順に仕えながら、同時に主人から全幅の信頼と愛情を得ていた。彼らにとっては、女性は弱きものであり、労わり庇うものであった。そうすることが彼らをして、自分自身を際立たせるものであることを知っていた。彼らにとって彼女達は決して召使いや奴隷ではなく、真の意味での一生の伴侶であったのである。これはまさしく対等な関係である。ルソーも亦、

女性を大事にし、その特性を磨くことに努力を尽くすことが、自分自身を高く評価させることをよく知っていたのである。

f) 趣味と教育： 奇妙に聞こえるかもしれないが、ルソーは女性の道徳的概念を形づくる基本は趣味である、という。器用さと才能によって趣味は形づくられる。趣味によって、精神は知らず知らずの内にあらゆる種類の美の観念に目覚め、ついには美と関わり合いのある道徳的概念に目覚める。⁽²⁵⁾ 慎ましさと貞淑の感情が男の子よりずっと早く出てくるのがその証拠である、またその感情を適正に発達させる技術のひとつが話をする才能である、という。何故なら、女性は話をするため趣味を必要とするからである。(これに対して男性は知識を必要とする) 少々のおしやべりをむやみに抑制せず、陽気に巧みにリードすることで、話をするのがいかに魅力的な楽しみとなるかの素地が出来れば、有益な道徳の教えが無理なく確立できる。礼儀正しさは女性にとっては情愛を示すものになるからである。そうした上で「どんな性質を男性は本当に尊重するのか、何が立派な女性の栄光であり幸福であるのか」を彼女たちに教えることが出来る、とルソーは主張する。⁽²⁶⁾ ルソーという人は確かに女性の心理分析に優れたものを持っていたことがよく分かる。しかし、これらのことはあくまで家庭教師的な立場に於いて可能なことであって、公教育での実施は現実には困難なことであろう。

若い女性が身を飾るのは、本能的な行動であっても、魅力の発現に必要なことであっても、過剰な費用のかかるものであってはならないと、ルソーは不器用な虚栄心を戒めている。また、女性が化粧をするのは虚栄心よりもむしろ退屈から行なうのである、とも見抜いている。このような外見的な装いではなく、自分のものとも言える魅力を開発して身につけてほしい、その為にはそのような全ての点において努力することが大事である。そうなれば、自然にその女性には新しい、才能が現われ、人目を惹かずにいられなくなる。ルソーのこれらの言葉は、外観を飾ることに心を奪われ、自分を磨くことを知らない現代の若い女性たちの多くにとっては、まことに耳の痛い話であるが、どれほどの女性が耳を痛くするかの方が、今日の重大問題であろう。

IV 宗教に関する教育について

前述したごとく、女性は宗教のような観念的な問題を体系的に論ずることが不得手である、とすれば、信仰問題は女性にとって従属的なものにならざるを得ない、とルソーは考える。この観点から、娘の信仰は基本的に父や夫のそれに従うべきであるとする。ただ、その信仰は形だけであっても、それが自然の秩序の従順さに沿うものであればよい、と付け加えている。女性の信仰は感覚的なもので理性の納得は必要がないというのなら、極端にはどんな宗教でもよいことになる。しかし、信仰というのは元来感覚的なものであり、その意味では、男性でも入信の動機は女性と変わりはない。むしろ、信仰そのものは女性において純粹で強い場合が多い。ルソーの指摘は宗教の在り方、あるいは信仰の導き方にある。ルソーの宗教及び信仰に関する考えは『エミール』第四章の「サヴォア助任司祭の信仰告白」⁽²⁷⁾ に詳細に述べられているが、さらに『ボモンへの手紙』⁽²⁸⁾ において伝統的な形式主義にこだわる教会教育の弊害を厳しく攻撃している。彼の宗教における教育の中に必ず理性という言葉が出てくるように、彼は理性によって秩序の認識が可能であるとみている。彼の場合は、自然感情と道德感情とがその宗教感情の基礎になっているから、感覚的に神の存在を認めることを前提とするのである。その上でその存在の雑多な属性を理性によって分類認識する。このことが自然宗教といわれる所以は、「純粹の道德、人間に有用であり、神にふさわしい教義」⁽²⁹⁾ をもち、「過ちも、不敬虔も、狂信もまねかない真の宗教」⁽³⁰⁾ であるからである。この確信から女性についての宗教教育は極端にならぬように警告する。女性に宗教を説く場合には「信じていることをはっきりと明示させる」⁽³¹⁾ ことを肝要とし、その宗教を知り、愛することの大事さを注意する。何故なら「漠然たる観念を信ずることが狂信の源泉」であり「不条理なことを信ずるよう要求することが狂気か無信仰をもたらす」⁽³¹⁾ からである。

神の属性がどうあれ、ルソーは神の存在そのものは肯定するし、また絶対的な服従を示している。「人間というものの運命を支配するものが存在し、私たちはみなその子であること、この支配者たる神は私たち全てに対して、正しい

人であり、お互いに愛し合い、善行をなし慈悲深くし、……現世の外見的な幸福は「無」であること、現世のあとに来世が存在し、そこでは、あの最高存在が善人に報い悪人を裁くこと、を各人が知ることなのだ。」⁽³⁰⁾ しかし、観念的なもの、あるいは神、を明白に教えることは難しい。ルソーの神は、自己の内部にあって、その「良心」を構成する存在でもある。「魂」の声でもある良心と「自尊心」を導く理性とは、いわば、道徳的秩序を成立させる大きな柱なのである。「良心の命令」すなわち「善に対する愛と、悪に対する憎しみ」は自然によって与えられた感情である。つまり「自分自身と自分と同じ人間とに対する二重の関係によって形成される道徳体系から良心の衝動が生まれる」、そして、人間の理性が彼に善を知るようにさせるとすぐ、「彼の良心は善を愛するように彼を仕向ける」。「この感情は生得的であり」⁽³²⁾、神によって人間に与えられたものである、という。真の宗教あるいは神の形がどうであれ、その大切さを愛することを、少女たちに早くから教えよ、とルソーは説いているのである。このことは道徳的秩序の成立において、宗教的基盤が薄くなりつつある現代社会における、道徳教育のひとつの指針として重要であると思われる。

V 男性と交際する方法について

女性の教育については、女性の内なる感情 (le sentiment intérieur, ⁽³³⁾) が人の評価に裏打ちされて、初めて完成するものであることはルソーのこれまでの主張から明らかである。「人々の意見に支えられない感情は、善い品行を世間的な名誉で飾る魂の繊細さを女性に与えず、感情に支えられない意見は、徳の代わりに外見を持ち出す、偽り多い品の悪い女性しか生まないであろう。」⁽³³⁾ 現代の多くの女性はどちらかといえば、自分のうちなる感情を信じるのではなく、人々の意見のみに動かされやすい感情のみによって行動するように見える。その意味においてルソーの指摘は現在に通用する。「従って、女性にはこの二つの導きの間を判断し、良心を迷わさず、偏見の誤りを正すことの出来る能力を養うこと」が大切なのである。この能力が理性であるが、その言葉になんと問題の多いことか。さまざまな考え方の違いが、女性本来の自然の

力を認め、それを尊敬し、それに誠実であるといった形から離れている、とルソーは嘆く。彼の時代と比較して、現代の女性はほとんど高学歴者であるにもかかわらず、その理性は必ずしも高められてはいない。「女性が不誠実でないかぎり、彼女を導く内なる感情に同意を拒むことは出来ず、なお変質させられていない性向のうちにこそ、義務の存在することを認めないではいけないはず」⁽³³⁾ とすれば、我々はルソーに言われる迄もなく、明らかに教育の方法を誤っているに違いない。「女性は自分自身の良心と他人の判断との双方に同時に依存している」のだから、才気と理性を養うことによって、人前でも恥をかくことなく、その態度と行動において、多くの人々に感銘を与え、尊敬を受けることになる。そういった特質は現代でも、望まれ得ない高い地位のものであり、しかも望んでも得難くなってきつつある。現代の女性にどれほど徳の高い尊敬に値する存在があるだろうか。経済力の増大や高学歴に反比例して、凜とした美しさをもつ女性が減少している。財力のもつ卑しさが内なる感情の発達を押さえ、外貌にまで現われている。我々はルソーと同じ嘆きを嘆かねばならない。

そのような特質はどのようにして導くべきであろうか。ルソーはその一つとして社交技術を卓越させることを奨めている。例えば、恋のテクニックは客を上手に接待するのと同じだ、と彼は言う。「世の中の女性に家事のやり方 (*l'art de tenir maison*) に卓越させるのと同じ性質の機知 (*le même tour d'esprit*) が、何人かの求婚者たちの気を逸らさない、巧みな付き合い方の技術に長けさせる。⁽³⁵⁾ 何人かの恋人たちを同時に、うまく操るのは大変難しい技術である。それぞれの男性に、彼女はみな自分のものだ、と信じ込ませなければならない。もし一人にでも嫌気を起こさせたら他の者も皆逃げだしてしまうことになる。「そう信じ込ませながら、この他の全ての人々にも、この彼の目の前で同じことを信じ込ませなければならないのだ。」⁽³⁶⁾ 女性が如何に潜在的に (自然に) そのテクニック (*coquetterie*) を持っているか、そして如何に男性がそのことに不器用か、ルソーは人の悪い、一つの例をだす。「当惑した人を見たいというのなら、一人の男性を、それぞれ密やかな関係を持っている二人の

女性の間において、彼がどんなに愚かな顔をするか見るとよい。一人の女性を二人の男性の間で同じような場合においてみるがいい。彼女がどんなに巧妙に二人とも騙すか、そしてどちらも、もう一人の男を嘲笑うようにさせるかをみて、驚くことであろう。」⁽³⁷⁾ さらに女性はオロオロしている男性を尻目に、驚嘆すべき行動をとる。「彼らの間に不平等を持ち込むふりをする」のである。つまり、一方の男性に愛しているのは貴方よ、と知らせ、他方にはここの所は心ならずも、こうしているのよ、と信じ込ませる。しかも、なんと、それがうまくいくのだ！ 男性の自尊心を利用した絶好の作戦であり、それぞれが勝手に彼女の愛を信じ切っているのだ。そして、実は、「彼女は自分のことしか考えていない！」⁽³⁷⁾ という。なんと、見事な女性心理の分析ではないか。彼の11歳の頃、年上のヴェルソン嬢やゴトン嬢に恋心を抱いて、二人から翻弄された経験から出発して、その後多くの女性たちから学んだ、恋の手練手管が、こんなところにも生かされている。

Usa ogn'arte la donna, onde sia colto

Nella sua rete al cun novello amante

Ne con tutti, ne sempre un stesso volto

Serva, ma cangia a tempo atto e semblante

(Tasse, Jerusalem delivree, IV, 87)

(女はあらゆる技術をもちいる、

新しい恋人を網にかけるために。

あらゆる男に、またつねに、同じ顔を見せることなく、

女は時に応じて、態度と様子を変える。)

それにしても、いつの時代にも、男と女とは変わらぬものである。そして我々は、なんと、飽きもせず、同じことを繰り返して生きてきたのであろうか。それはともかく、女性のこの *coquetterie* はどんな教育によって完成するのであろうか。

このテクニックの秘密は「鋭い観察に基づいている」とルソーは言う。女性の所有する特質に加えて、機転 (*l'esprit*)、洞察力 (*la pénétration*)、精妙な観

察力 (les observations) を女性は学ぶべきである。そしてそれらをどう生かすかが女性の才能である。女性は「嘘つき」であるのではなく、「そうなる」のであって、「嘘をついているときでさえ、嘘つきではない」、それは天賦の巧妙さである、と彼は驚嘆する。その天賦の才能に磨きを掛けることが女性を輝かし、その本性の coquetteire の限界を知りつつ、最高度に発揮することを学ぶべきである。人はそれによって彼女を真の誠実さのある女性として評価する。⁽³⁷⁾

女性が直観に優れているとすれば、彼女たちに義務を与えることは、その意義については理解できても、実践については必ずしも容易ではない。その義務というのは年令や置かれている立場によって様々である。女性が学ぶべき第一のことは、義務を実践することによって、そこから得られる利益を考えて、その義務を愛することである。女性としての本分に誇りをもつことによって、どんな立場においても女性はよい女性でいられる。この職分を愛することで、女性は何を学ばねばならぬかを知ることが出来る。女性について、ルソーが述べたこれらのことは、現代においてもまさにあてはまる。

女性は理論的な研究には向いていない、とルソーが述べているというのは必ずしも間違いではない。彼は次のように言う。「抽象的、純理的な真理の探究、諸学における原理や公理の探求など、全て観念を一般化することをめざすことは、女性の領域には属さない。」⁽³⁸⁾ ルソーの時代から2世紀ほど経た現代の風潮をみると、社会および自然科学の分野には、女性研究者が増加し、男性を凌駕する業績を上げているが、相対的に数は少ない。とくに、観念的な学問、宗教、哲学の分野では、今日でも、有能な女性の名はあがってこない。これらの現実から、やはり、ルソーの言葉を認め得ざるを得ないのではなかろうか。「女性がなすべきなのは、男性の発見した原則を応用すること」及び「原則の確立へ男性を導いていく観察を行なうこと」である、とするルソーの言葉は、差別的であると、しばしば非難される。しかし、冷静に考えてみると、女性が男性の分野に補助的な役割をはたしていることは事実であるし、注目すべき仕事を成し遂げた女性においても、必ずしも全てにリーダーシップをとっているとは限らない。人は、それは男社会で維持された構造であるからと言うが、社会・

自然科学分野での優れた業績の多くが、男性と女性とのよい意味でのパートナーシップの下で遂行されたものであることも認めねばならない。その関係において、両性は、ルソーの言う見事な相互補助的な関係を維持しているのである。彼はさらに踏み込んで、女性にそのような優れた仕事をさせる原動力は「男性の情念」である、と見抜いている。

女性の本分がそのようであるなら、全ての女性がその才能を生かすべく教育されたら、素晴らしい「市民」が出現する、とルソーは考える。この考えに基づいて、彼は女性が男性を研究することを奨めているのである。それも男性一般を抽象的に研究するのではなく、周囲の男性の心、考え方、意見などを研究する。とくに、夫たるべき、あるいは父親たるべきまたは教師たるべき男性の精神を研究することなのである。その為に、男性の言葉、行動、眼差し、身振り、態度によって男性の感情を洞察することを学ぶように、と強調する。「男性は人間の心について女性よりも上手に哲学するが、女性は男性よりも上手に人間の心を読み取る」⁽³⁹⁾ と。女性と男性との職分は明かに異なる。「女性はより多くの才気をもち、男性はより多くの天才をもち、女性は観察し、男性は理論立てる」⁽³⁹⁾、ルソーはこのようにまとめる。「この両者の協力から、人間の精神が独力で獲得し得るもっとも明晰な知と、もっとも完全な科学が生まれる。これは自然によって与えられた人の能力を最大に発揮する目標であり、道具なのだ。」

ルソーは、まさに現代においても望むべき、男女両性の完全な調和による理想の人間形成、またそれによって生成し得る理想社会の実現を夢見ていたのであり、そしてそれ故に人間の完全理解が必須であることを十分認識していたのである。

さて、次の問題は「世間を知ること」についてである。女性の学問は実践的なものであるべきとしたら、そのよい手本は全て世間にある。その手本から、誤りなく真実を学ぶことが必要である。読み方を間違えると道を誤る。このことはいつの時代にも当てはまることである。ルソーの時代には結婚前の女性は家に閉じこめられ、他方で妻たちは「社交界を駆け回」っていた。これを「娘

と妻を逆にせよ」そうでなければ「社交界と一緒にいきなさい」と、ルソーは言う。汚れのない健全な目で、快樂の実態を見つめさせるべきだ。そうすれば、その正体を知り、平穩で平和な家庭内の暮らしを楽しむようになる、という考えである。どうやら、ルソーは自然が女性に与えた資質を過大視しているのかもしれない。このやり方が必ずしもよい結果ばかり生み出すものではないことを、現代の我々は知っている。妻も、娘たちも、自己中心的な自由さの中で快樂を求めてしまうものである。しかし、我々は単に娘達に勝手気儘な自由を与えただけなのかもしれない。「綿密な教育の基盤にたってこそ、真の健全さが養われる。その点を疎かにしてはいないだろうか」と、ルソーの指摘は痛烈である。「もし、娘たちに華やかな社交界をみせたら、忽ちのめりこんで、誰もそこから離れたがらない」と、人々は言うかも知れない。「あなた方は、心を動かされずにこれをみる準備を十分与えておいたのか、それが表しているもののことを十分報せておいたのか、それをあるがままに描いておいたのか、虚栄心の生む錯覚に対して十分武装を与えておいたのか、こうした喧騒のうちには、見出せない真の楽しみへの趣味も彼女たちの若い心のうちに植え付けておいたのか、彼女たちを惑わす偽りの趣味から守ってやるために、どんな用心を、どんな処置をとっておいたのか」⁽⁴⁰⁾ 我々は、ただ、ただ、頭をすくめ、首をうなだれるばかりである。それでは具体的に、どうしたらよいというのか。彼は「それは母親自身の姿が模範なのだ」という。なるほど、母親自身が社交界でどのような態度で実在するのか、その姿が素晴らしければ素晴らしいほど、娘は母親に傾倒し、尊敬し、それに近付きたいと思うはずである。そうすると、現状の娘達の行動の責任は全て母親にあることになるのだが。

現代には、いわゆるルソー時代のような社交界は存在しない。高価な衣装、装飾品、没個性的に画一化された化粧など、「悪徳」と呼ばれる習俗に陥りやすい、外見を競いあう場は表面的にはどこにもない。しかし、女性のそうした悪徳は、主に「都会」という場でますます肥大化している。ルソー的に言えば、女性の理性を支える「世間の評価」が曖昧になってきたためである。女性の内なる感情だけでは、徳を持続けることは出来なくなった。理性を支える人々

の良識というものが、消えてしまったのである。若い娘達は、脆くも頼りない、幼い「内なる感情」だけによって、己れの行動を決めざるを得ない現状に、内心不安を感じながら、その不安を追い払うように、放縦に慣れていくのである。ルソーは都会の罪についてこう述べている。「大都会においては、退廃は人が生まれると共に始まり、小都会においては、理性が芽生えると共に始まる。地方の若い女性たちは幸運にも与えられている習俗の素朴さを軽蔑するように教えこまれ、大急ぎで都会へ出て、現代の習俗の腐敗の分け前に与ろうとする。才能という美名で飾られた悪徳が、彼女たちの旅の唯一の目標であり、辿り着いてみると、都会の女性たちの高貴な放縦に遠く及ばないことを知って、恥ずかしくなり、彼女たちもまもなく都会の女性たちにふさわしくなる。悪はどこで始まるのか、悪を計画する土地でなのか、それとも悪を実行する土地でなのか。」⁽⁴¹⁾ この都会が、ルソーの時代のパリであり、現代のパリであり、ニューヨークであり、そして東京である。彼の深い洞察に今更ながら驚くのである。

いろいろな悪条件にもかかわらず、女性は一貫して本質的に徳を判断する能力を持ち続けている、とルソーは期待する。その判断力を正当に発達させてやらなければならない。そのために、女性に誠実に、明晰に、わかりやすく、教えこむことが大事である。義務の必要性を教えるとき、その理解可能な理由を説き、賢明であることが、彼女にとって大きな利益であることを分からせる。とくに宗教に関することを教える場合は慎重にせよ、と彼は何度も繰り返す。そうすることによって、女性が正当な判断力を所有し、それによって、男性が正当に評価されるからである。「賢明、かつ、敬虔に育てられた少女は、たしかに誘惑に対する強力な武器を持つことになるが、もっぱら神秘めかした戯言を与えられた少女は、間違いなく、巧妙な誘惑者の餌食になってしまう。」⁽⁴²⁾ このように言うルソーの脳裏には、簡単に誘惑に乗ってしまったヴァランス夫人へのやりきれない苛立たしさと、愛情が浮かんでいたに違いない。それにあらぬか、この段階から、少女には積極的に、男性の見分け方を実践させることを奨めている。「善行の人、優れた人を彼女たちに描いてみせ、これを見分け愛すること、自分たちの為に、これを愛することを教えるがいい。」⁽⁴²⁾

このようにして教育された結果、誠実でもあり、愛らしくもあり、賢明である女性、自分を尊敬せざるを得ないように男性を導く女性、控えめで慎ましい女性、に成長する。そのような女性に対しては、男性たるもの「ちょっと合図するだけで、世界の果てに、戦いに、栄光に、死に、彼女の好きなところに」喜んで赴くのである。⁽⁴²⁾ このような教育は、15, 6歳の少女のうちに終えなければならない。そして、まさにそのような配慮にしたがって、ソフィーが育てられたのである。

VI 理想の女性 ソフィー、そのプロフィール

こうして育てられた理想の女性、ソフィーの姿がここで具体的に浮かび上がってくる。彼女は感受性、洞察力に富み、誠実で美德を何より愛する。有り余る才能に恵まれているが、とくにそれらを伸ばされてはいない。せいぜい趣味の段階に止まっている。代わりに家事仕事を念入りに教え込まれ、とくに清潔さについて敏感である。他人の過ちには辛抱強く耐え、自分の過ちは喜んで償う従順さがある。要するに、彼女の中では様々な性質がうまく組み合わせられて好ましい性格を作っている。

外観の容姿は十人並み、服装は簡素であるが優雅さが兼ね備えられている。顔の造作とは別に顔立ちにも深い心映えが表れている。一般に、人間の顔の表情には心の内面が写しだされるものである。彼女は美人ではないが、彼女のそばにいと男たちは美しい他の女性のことを忘れてしまう。そして美しい女性たちも自分に不満を感じてくる。心の内面の豊かさは、ちょっとした話し方、物腰、態度にも表れてくるのであろう。外見上さして目立たない存在ゆえに人は無関心に彼女に近寄れるだろうが、いったん彼女の人となりに接すると、彼女から離れてゆくことに無感動ではいられなくなるのである。決して才気走ることのない適度の知性と好ましい性格とを内面に湛えている女性、それがソフィーの姿である。

もし、現代においてソフィーなる女性を想定したとすれば、彼女はどのような存在であろうか。ルソー的女子教育の現代的意義を考える場合、この仮定は

一つのヒントになろう。確かに彼女には技術的な訓練が家事や家政に偏って与えられている点では物足りなさが感じられるであろう。現代の複雑な社会機構の中で主体的に生きようとすれば、たとえ家庭人であっても多様な知識と幅広い視野が必要である。家庭の枠にとらわれた狭い視野では遅かれ早かれ限界がやってくるであろう。しかし、見方を変えれば、知識や訓練的な偏りというのは、当人が興味をもち努力さえすればいつでも是正し、新しい分野を開拓することが出来る性質のものである。しかもそれは若い世代には比較的容易なことである。聡明なるソフィーであれば、すぐさま新しい知識を取り入れて自分の知的水準の向上を図ることが出来るであろう。よって、知識や技術より、人間的な評価にあたってさらに重要なものが、他に存在する。それは人間性の高邁さである。ソフィーのもつ人間性は現代においてどのように評価されるであろうか。

Ⅶ ルソーの女子教育の現代的意義

物質至上主義や経済効率を優先する現代にあって、人々は次第に精神を疲弊させ、心のよりどころを喪失し、人間としての尊厳さえ見失いかけている。こうした風潮のなかで、荒廃した人間社会を蘇らせる、もっとも重要な手段の一つは人間としての本質を取り戻すことではなかろうか。その意味において、ソフィーのもつ徳性の高さは、とくに現代の人々にとっても、憧憬の対象であろうし、彼女の人間性は理想的な存在となることは疑いない。これまで見てきたように、ソフィーへの教育目標は、様々な良い才能をもった少女の感性、洞察力、誠実さ、美意識といった人格的な内面を確立し、磨き上げることにあった。しかも同時に、それは人間形成の本質に迫る重要な教育でもあったことを見逃してはならない。人間がもっとも人間らしく尊厳をもった存在になろうとするとき、その人格の中には美しいもの、真実のものを求め、人間を含めたあらゆる生きものに対して愛情と協調を示し、その心を謙虚に感じとり、自分の心を誠意を持って語ることが出来る、優れた人間性が求められよう。ソフィーの教育には、まさにそのような人間性の豊かさが追求されているといえるのであ

る。こうした女性の教育方針の本質的な部分は、根源的な高邁な精神を磨くことを主眼としたものであり、現代であっても、また現代であるからこそもっとも渴望されているものなのである。

この地球上において、人類は長年にわたって自ら覇者を任じ、自らの権威のために多くの征服と破壊を重ねてきた。その結果、産業経済が進歩という名のもとに大きな発達を遂げ、人間社会は高度な文明の発達を獲得した。しかし、地球に君臨するオールマイティーな存在であると思いが上がった人間が現代に至って気付いたのは、自らの生命を守ってくれていた地球環境の破壊であり、民族による対立抗争であり、あまりにも複雑化された社会の根源的な腐敗であり、その中で生きる人々の自己喪失と疎外感であった。発達したはずの文明社会は墮落し、発展しつづけたはずの人間が病んでいる。その原因には主として、人間があらゆる事柄に関して人間的視野を欠いたことにありはしないか。我々は、人間というものが地球上に生きる数多くの生物の一つとしての、動物の一員としての存在であることを、忘れていたのではなかろうか。肥大化し、地球を支配するものとしてあまりにも傲慢になりすぎてしまった人間には、もはや滅亡への道しか残されていないのかもしれない。遅れ馳せながら今、この高度に発達した現代社会にあってこそ、その錯覚から目覚め、原点に戻らなければならない。この危機を克服するために、パスカルの言うところの、か弱き一本の葦としての存在である人間の姿を再認識して、自然との協調をはかりつつ謙虚に生き、真実のために人間の叡知を傾ける努力を続けなければならないであろう。人間が人間らしく、より豊かな人間性を求める努力を続けるならば、この硬直した社会体制も変化することになるだろう。そうすれば、社会のための人間、という視点が、人間のための社会へと転換されることになる。対立抗争は和平・協調へと変わり、産業発達の優先は生活重視へと強まるであろう。袋小路に陥った人間を救うものが人間性の高揚しかないと気付く時、そこにこそルソーの思想、特に女子教育の理念の現代的意義が見い出されるのである。

権力的、経済優先的な世界を変貌させるためには、産業、経済、政治等のあらゆる分野において、謙虚で有徳な人間的視点が必須である。それらが加わっ

てはじめて、適切な規模の発展が可能となる。このような人間本来の姿を重視した社会では、常に、人間とはどうあるべきかといった、人間観察・人間追求の視点が求められる。ここにおいてこそ、女性本来の特質、感受性、洞察力、美意識などが生かされるのである。

これまで述べてきたように、ルソーの女子教育は男性中心、家庭指向といった偏りが見られ、それ故に偏狭な教育論として批判されがちである。しかし、当時の時代背景としての事情を考慮して、その視点を切り離し、本質的な女子教育の内容を分析することによって、我々は彼の女子教育に、より高邁な優美さと寛容と愛情に満ちた、豊かな人間性の追求がなされていることに気が付くのである。それは女性にしかなし得ない、豊かに育むことの出来る人間性である。今、人間の傲慢さによって行き詰まった社会と、心を病む人間を、原点に戻し、生气を与えられるのは、まさにこのような教育によって育まれた、有徳な女性的視点なのである。自然を、人間を鋭く観察し、感じ、知性を以て判断し、その美意識によつて的確に自己表現することにより、より人間的方向へと導く、そういった才能を育てる女子教育が望まれている。ルソーは人間社会での階級を二つしか認めていない。一つは「考える人びとの階級」であり、もう一つは「考えない人びとの階級」である。そしてこの違いは教育に由来するとしている。その意味でも現代では、女性において「考える人びとの階級」が、ますます増加することが必要である。まさに『エミール』は今日求められている女子教育の本質を示したものであるといえよう。

《註》

本稿において引用した「ルソーによる言葉」は『エミール』樋口謹一訳、ルソー全集、第6巻（上）及び第7巻（下）、白水社、1980年版によった。以下特に断らないかぎり引用は同書による。原書は J.J. Rousseau: *Emile, Bibliothèque de la Pléiade. Oeuvres complètes IV.* を参照し、訳語あるいは意味について重要と思われる部分については原文を加えた。

(1) 横山ひろみ、『ルソーの女子教育論と女性観』 親和女子大学研究論叢、26号、1-22, 1993。

(2) 『エミール』V, (下), P. 296。

(3) 同上, I, (上), p. 32, II, p. 102.

(4) 同上, I, (上), p. 18-19.

(5) 同上, I, (上), p. 19-20.

(6) 同上, II, (上), p. 205.

(7) En principe ils ne sont ni égaux, ni inégaux, ils sont semblables et différents, nous dirons bientôt complémentaires. p. 1629.

(8) Elles ont besoin d'un tuteur, sinon d'un maître. Enfin elles sont visiblement faites pour l'homme, chez qui, ne l'oublions pas, la sexualité n'est pas un vrai besoin. p. 1629.

(9) 『エミール』 V, (下), p. 159.

Par l'anatomie comparée et même à la seule inspection l'on trouve entre eux des différences générales qui paroissent ne point tenir au sexe; elles y tiennent pourtant mais par des liaisons que nous sommes hors d'état d'appercevoir; nous ne savons jusqu'où ces liaisons peuvent s'étendre; la seule chose que nous savons avec certitude est que tout ce qu'ils ont de commun est de l'espèce, et que tout ce qu'ils ont de différent est du sexe; sous ce double point de vüe nous trouvons entre eux tant de rapports et tant d'oppositions, que c'est peut-être une des merveilles de la nature d'avoir pu faire deux êtres si semblables en les constituant si différemment¹. p. 693.

(10) 同上, p. 160.

Si les femelles des animaux n'ont pas la même honte, que s'ensuit-il? Ont-elles comme les femmes les desirs illimités auxquels cette honte sert de frein? Le desir ne vient pour elles qu'avec le besoin; le besoin satisfait, le desir cesse, elles ne repoussent plus le mâle par feinte mais tout de bon: elles font tout le contraire de ce que faisoit la fille d'Auguste, elles ne reçoivent plus de passagers quand le navire a sa cargaison. p. 695.

(11) 同上, p. 161.

(12) La raison des femmes est une raison pratique qui leur fait trouver très habilement les moyens d'arriver à une fin connue, mais qui ne leur fait pas trouver cette fin. p. 720.

(13) 『エミール』 V, (下), p. 189.

(14) 同上, p. 166.

Dès qu'une fois il est démontré que l'homme et la femme ne sont ni ne doivent être constitués de même, de caractère ni de tempérament, il s'ensuit qu'ils ne doivent pas avoir la même éducation. En suivant les directions de la nature ils doivent agir de concert, mais ils ne doivent pas faire les mêmes chose; la fin

des travaux est commune, mais les travaux sont différens et par conséquent les goûts qui les dirigent. p. 700.

(15) 同上, V, p. 167.

(16) 同上, V, p. 168.

Croyez-moi, mère judicieuse, ne faites point de vôtre fille un honnête-homme, come pour donner un démenti à la nature; faites en une honnête-femme, et soyez sure qu'elle en vaudra mieux pour elle et pour nous. p. 701.

(17) 同上, V, p. 168.

Non, sans doute: ainsi ne l'a pas dit la nature qui donne aux femmes un esprit si agréable et si délié; au contraire, elle veut qu'elles pensent, qu'elles jugent, qu'elles aiment, qu'elles connoissent, qu'elles cultivent leur esprit comme leur figure; ce sont les armes qu'elle leur donne pour suppléer à la force qui leur manque et pour diriger la nôtre. Elles doivent apprendre beaucoup de choses, mais seulement celles qu'il leur convient de savoir. p. 702.

(18) 同上, V, p. 169.

(19) 同上, V, p. 173.

(20) 同上, V, p. 174.

(21) Je ne puis concevoir que cet abus poussé en Angleterre à un point inconcevable n'y fasse pas à la fin dégénérer l'espèce, et je soutiens même que l'objet d'agrément qu'on se propose en cela est de mauvais goût. p. 705.

Tout ce qui gêne et contraint la nature est de mauvais goût; cela est vrai des parures du corps comme des ornemens de l'esprit. La vie, la santé, la raison, le bien-être doivent aller avant tout; la grace ne va point sans l'aisance; la délicatesse n'est pas la langueur, et il ne faut pas être mal-saine pour plaire. On excite la pitié quand on souffre, mais le plaisir et le desir cherchent la fraîcheur de la santé. p. 706.

(22) 『エミール』, V, (下) p. 177.

La dissipation, la frivolité, l'inconstance, sont des défauts qui naissent aisément de leurs premiers goûts corrompus et toujours suivis. Pour prévenir cet abus apprenez-leur surtout à se vaincre. Dans nos insensés établissemens la vie de l'honnête femme est un combat perpétuel contre elle même; il est juste que ce sexe partage la peine des maux qu'il nous a causés. p. 709.

(23) L'attachement, les soins, la seule habitude feront aimer la mère de la fille, si elle ne fait rien pour s'attirer sa haine. La gêne même où elle la tient, bien dirigée, loin d'affoiblir cet attachement, ne fera que l'augmenter, parce que la dépendance étant un état naturel aux femmes, les filles se sentent faites pour

obéir. p. 710.

(24) 『エミール』, V, (下) p. 178.

(25) 同上, V, p. 186.

(26) 同上, V, p. 189.

Je remarque en général dans le commerce du monde que la politesse des hommes est plus officieuse, et celle des femmes plus caressante. Cette différence n'est point d'institution, elle est naturelle. L'homme paroît chercher davantage à vous servir et la femme à vous agréer. Il suit de là que, quoi qu'il en soit du caractère des femmes, leur politesse est moins fausse que la nôtre, elle ne fait qu'étendre leur premier instinct; mais quand un homme feint de préférer mon intérêt au sien propre, de quelque démonstration qu'il colore ce mensonge, je suis très sur qu'il en fait un. p. 719.

(27) 同上, IV, (下) p. 19.

(29) 『ジュネーヴ市民ジャン＝ジャック・ルソーからパリ大司教クリストフ・ド・ボームンへの手紙』ルソー全集, 第7巻, 西川長夫訳, p. 439-547. 白水社

(29) 『エミール』, IV, (下) p. 65.

(30) 同上, V, (上) p. 197.

(31) 同上 p. 190. p. 196.

(32) 同上, IV, (下) p. 55-56, p. 62.

(33) 同上, V, (下) p. 198.

Cette règle est le sentiment intérieur. Je ne répéterai point ce qui en a été dit ci-devant: il me suffit de remarquer que si ces deux règles ne concourent à l'éducation des femmes, elle sera toujours defectueuse. Le sentiment sans l'opinion ne leur donnera point cette délicatesse d'âme qui pare les bonnes mœurs de l'honneur du monde, et l'opinion sans le sentiment n'en fera jamais que des femmes fausses et deshonnêtes qui mettent l'apparence à la place de la vertu. p. 730.

(34) 同上, V, p. 199.

Dès là qu'elle dépend à la fois de sa propre conscience et des opinions des autres, il faut qu'elle apprenne à comparer ces deux règles, à les concilier, et à ne préférer la première que quand elles sont en opposition. Elle devient le juge de ses juges, elle décide quand elle doit s'y soumettre et quand elle doit les récuser. p. 731.

(35) Le même tour d'esprit qui fait exceller une femme du monde dans l'art de tenir maison, fait exceller une coquette dans l'art d'amuser plusieurs soupirants. p. 733.

(36) 『エミール』, V, (下) p. 201.

(37) 同上, p. 202-203.

En les traitant également ne montreroit-elle pas qu'ils ont les mêmes droits sur elle? Oh qu'elle s'y prend bien mieux que cela! Loin de les traiter de la même manière elle affecte de mettre entre eux de l'inégalité; elle fait si bien que celui qu'elle flatte croit que c'est par tendresse, et que celui qu'elle maltraite croit que c'est par dépit. Ainsi chacun content de son partage la voit toujours s'occuper de lui, tandis qu'elle ne s'occupe en effet que d'elle seule¹.
p. 734.

(38) 同上, p. 205.

(39) 同上, p. 206.

Ils philosopheront mieux qu'elle sur le cœur humain; mais elle lira mieux qu'eux dans les cœurs des hommes. C'est aux femmes à trouver, pour ainsi dire, la morale expérimentale, à nous à la réduire en système. La femme a plus d'esprit, et l'homme plus de génie; la femme observe et l'homme raisonne; de ce concours résultent la lumière la plus claire et la science la plus complète que puisse acquérir de lui-même l'esprit humain, la plus sûre connoissance, en un mot, de soi et des autres qui soit à la portée de notre espèce; et voilà comment l'art peut tendre incessamment à perfectionner l'instrument donné par la nature. p. 737.

(40) 同上, p. 207.

J'attends la clameur qui s'élève contre moi. Quelle fille résiste à ce dangereux exemple? A peine ont-elles vu le monde que la tête leur tourne à toutes; pas une d'elles ne veut le quitter. Cela peut être; mais avant de leur offrir ce tableau trompeur les avez-vous bien préparées à le voir sans émotion? Leur avez-vous bien annoncé les objets qu'il représente? Les avez-vous bien peints tels qu'ils sont? Les avez-vous porté dans leurs jeunes cœurs le goût des vrais plaisirs qu'on ne trouve point dans ce tumulte? Quelles précautions, quelles mesures avez-vous prises pour les préserver du faux goût qui les égare?
p. 738.

(41) 同上, p. 209.

Dans les grandes villes la dépravation commence avec la vie, et dans les petites elle commence avec la raison. De jeunes provinciales instruites à mépriser l'heureuse simplicité de leurs mœurs s'empressent à venir à Paris partager la corruption des nôtres; les vices ornés du beau nom de talents sont l'unique objet de leur voyage, et honteuses en arrivant de se trouver si loin de

la noble licence des femmes du pays elles ne tardent pas à mériter d'être aussi de la capitale. Où commence le mal à votre avis? dans les lieux où l'on le projette, ou dans ceux où l'on l'accomplit? p. 740.

(42) 同上, p. 214-215.